こごみ日和

京都発！ごみ減量情報誌

めざすは脱石油文明
同志社大学名誉教授　郡嶌 孝さん

金継ぎ『STOCK ROOM』

京都市ごみ減量
めぐるくん推進友の会

なごみ日和 / 海平和

『Dari K』の挑戦

vol.83

西院ふれあいまつり

ごみにまつわるこの数字なぁに？

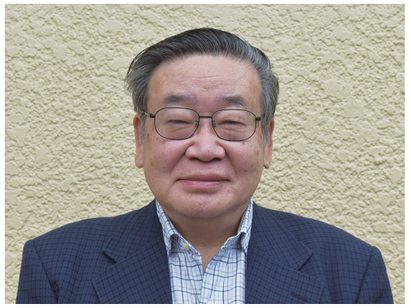
年間 891 万トン

答えは Web へ！
＊トップページ「よもやま話　ごみ減のごみ袋」をご覧ください

表紙デザイン：嵯峨美術大学デザイン学科３年　乾志帆

京都市ごみ減量推進会議

特集



めざすは脱石油文明

同志社大学名誉教授　郡嶌 孝さん

世界的に大きな問題として認識されるようになった **プラスチックごみ問題！**

なぜ減らすのか、どう減らすのか、減らして、どのような社会を目指すのか。手法や手段だけでなく、これから求められるのは、一本筋の通った哲学。

同志社大学名誉教授　郡嶌孝さんにお話しをうかがいました。

脱石油文明の構築に向けた戦略

世界に目をやると、プラスチックの削減の動きは、切実な実害の発生が対策をとるきっかけになっている場合が多い。アフリカや南アジアの国々では、レジ袋が排水溝をふさぎ、水たまりの発生によるマラリアの蔓延や洪水被害の長期化が問題となり、レジ袋規制につながった。また、死んだ海洋生物の胃からプラスチック袋が大量に見つかったり、ウミガメの鼻にストローが刺さっている映像などがYouTubeにアップされると、プラごみ問題への関心が一気に高まった。ただ、実害が利害のない人の共感まで引き出すかは別問題である。BBCの「ブループラネット2」は世界中で見られ、ナビゲーターのアッテンボロー卿の名前をとって、「海洋プラごみ問題」への関心の高まりを「アッテンボロー効果」と呼んでいる。

一方、ヨーロッパ諸国やアメリカの一部の州での脱プラスチックの動きは、実害への対処といったレベルではない。脱石油文明といったビジョンを描き、その実現に向け戦略的に政策を進めている。電力では再生可能エネルギー、自動車ではＥＶ車や水素自動車の普及、石油化学産業もプラスチックの循環的再利用技術や代替素材の開発を進めている。

その背景には、ピークオイル問題がある。2005年に石油の需要が供給を上回り、化石燃料に頼った社会の限界が見えてきた。石油に依存しない社会をどのようにつくるか、その大きな動きの中の１つとして、石油由来のプラスチックからの脱プラスチック政策が打ち出され、社会をあげて推進しようとしている。

ゲームチェンジャー

ＥＵやアメリカでは、Circular Economy（循環経済）、あるいは、ごみゼロ社会の構築が社会課題になっているが、脱プラスチックはその試金石になるだろう。

ヨーロッパ諸国、特にＥＵはゲームチェンジャーを目指している。それまでの社会制度の延長で考えるのではなく、新しいルールのもと、新たな科学技術の開発と、循環産業の成長を促し、その普及を通じて次の社会をリードする存在になろうとしている。これこそ、使い捨て経済からの決別であり、循環経済の始まりとしてのニュー・プラスチックス経済への挑戦と言える。

アメリカはどうか。トランプ政権になって以降、環境政策に後ろ向きな姿勢がよく報道されるが、アメリカは連邦国家で州ごとに環境政策が異なる。民主党知事を擁している州は、連邦政府より意欲的かつ先進的な環境政策を打ち出している。

日本はどうか。2017年末の中国の廃プラ輸入禁止措置を受けて、外国に頼ったリサイクルができなくなった。国内でリサイクルを進めようとする中で、リサイクルが困難なものやコストがかかるものについて、これまでは人件費の安い海外の途上国に輸出していた。これらのリサイクルも国内でやるとなれば、結局のところ、リサイクル困難なプラスチックの使用の禁止や制限をしていくことが必要である。

日本では、リデュースというとペットボトルやレジ袋の肉厚を薄くすることのように理解している人や企業があるが、ＥＵでは、厚さ５ミクロン以下の薄く軽いレジ袋を規制している。レジ袋が有料化されていても、何かのことで入手したレジ袋であれば、再使用を促す意味で厚みをもたせている。ライフサイクルアナリシス（LCA※）的には、何度も使用した後のレジ袋は、最後はごみ袋として使ってもらえばいい。

環境と社会、経済を統合したビジョン

プラスチック製袋の代替素材として紙や布がある。当然ながら、紙や布の製造にも資源とエネルギーが必要であるが、これが意外に大きい。紙袋の場合、CO_2換算で同サイズのプラ製の袋と比べ、３倍程度環境負荷が大きいという試算がある。布であれば綿花栽培で多くの殺虫剤と水を用いる。布袋は再使用を前提にしたものだが、300回程度再使用しないとプラ袋より環境負荷が低くならないという試算もある。そういったこともあり、使い捨て容器包装プラスチックの削減活動と、オーガニックコットンを広める活動の接点が生まれている。LCAでは、プラスチックの再使用袋の環境負荷が一番低いという結果もある。再使用も何回再使用するかによって環境負荷が変わる。また、布袋は週一回洗わないと、サルモレラ菌の繁殖で死亡例もある。

プラスチックそのものが悪いのではなく、プラスチックとどのようにつきあうか、何を必要とし、何を断念するかの哲学が必要である。「使わない工夫、断る勇気」も必要である。汎用性のあるプラスチックは用途が広く、多くの雇用を生み出している。それ故、プラスチックに替わる新たな産業を生み、新たなルールづくりによって、売りっぱなしではなく、製造者が静脈を動脈に取り込み、内部化し、あるいは、静脈産業とのコラボも含めて製品管理する、それによって雇用をつくる。そこには環境と社会、経済を統合したビジョンが必要である。これは、まさに今注目を集めているSDGsの発想そのものであり、どのように知恵を出していくかが問われている。

使い捨て消費からの決別と、筋の通った哲学

資源効率が注目されることがある。より少ない資源で、より多くの製品を生み出そうとするもので、資源生産性ともいう。しかし、資源効率だけでは限界がある。より広義の資源効率は、モノのもつ機能・サービスを効率化する、サービス（利用）効率は、より少ない資源で、より多くのサービスを生み出す。さらには、より少ないサービスでより多くの満足を生み出す充足効率に基づく「脱物質化」への転換も必要である。

より少ないモノで多くの満足を得るには、モノの所有から、サービスの提供へと産業のあり方や、ライフスタイルが変化しないといけない。それぞれのニーズをつなぎ、モノで儲ける社会でなく、サービスと満足の提供で成り立つ社会。それは禅の思想「足るを知る」に通じる。日本こそ、そして京都こそ、充足効率に基づくライフスタイルを世界に発信することが重要である。それでこそ「日本に、いや、世界に、京都があってよかった」のである。

近代経済学者の都留重人氏は、最晩年に『市場には心がない』を著した。この中で、自由競争の行きつく先に、強者による一人勝ちの社会があると警告した。

京都における空き缶論争をリードした長尾憲彰氏は、「市民のごみからの自立は、市民自らが自立した社会によって実現する」と話されていた。企業による大量の情報に翻弄されるのではなく、何を必要とし、何を必要としないのか、使わない工夫や断る勇気を育むためにも、自立が根底になければいけない。Rethinkこそ従来の循環の3Rに優先する。3Rを一歩さらに上流に進めて、Refuse（プラスチックを断る勇気）Reduce（プラスチックを減らす努力）Reuse（プラスチックを循環再利用する）をすすめよう。

経済学者で公害問題や平和活動にも取り組んだ宇沢弘文氏は、1990年代に「公共」という言葉について、「公と共は別物であり、公は行政を指しこれに頼りすぎるのはよくない。共の領域を広め、強化していくことが必要である」と主張した。モノのシェアが普及したシェアエコノミーとはまさに共の領域の拡大によって生まれるものである。その共創の社会を作ろうではないか。

※LCA（Life Cycle Analysis）：商品が原材料の採取から製造、流通、消費を経て廃棄にいたるまでにたどる各ステージで環境への負荷がどれだけ軽減されているかを評価する手法。

京都市ごみ減量推進会議では、脱プラ、減プラへの思いを表していただくステッカーを作成し、希望される方に配布しています。水筒、文具、パソコンなど、お好きな場所に貼って意思表示してください。熱い思いから、さりげない表現まで様々なタイプを用意しています。詳しくは京都市ごみ減量推進会議事務局までお問合せください。

リーフ茶の普及で、ペットボトルを減らそうサイト

脱プラ、減プラ、キーパーソンインタビュー第７回 郡嶌 孝さん（2019年10月21日堀　孝弘取材）「世界は、なぜ脱プラに向かうのか」から抜粋
https://kyoto-leaftea.net/informations/informations-1933/

京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会幹事の皆さん

食品ロスを減らしたい、冊子に込めた想いよ、届け！

京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会

2019年10月に食品ロス削減推進法※が施行され、国や各自治体、食品を扱う企業に加え、家庭や地域でも食品の「もったいない」を減らしていこうとする機運が高まっています。

そんな中、京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会（以下、めぐるくん推進友の会）が食品ロス削減を呼び掛ける冊子『食品ロスを減らそう!!～どうすれば食品ロスを減らすことができる？～』を作成。子育て世代を中心に読んでもらいたいと、家庭でできる取組やメンバーから募った「おばあちゃんの知恵袋」を紹介。イラストや図解入りで分かりやすく伝えています。

冊子『食品ロスを減らそう!!』に込められた想いや今後の活動について、めぐるくん推進友の会幹事の皆さんにお話を伺いました。

身近な問題　「食品ロス」

冊子を作るきっかけとなったのは、2018年12月に行っためぐるくん推進友の会会員へのアンケート調査の結果でした。「どんな環境問題に興味・関心があるか」、「会でどのような活動をしたいか」を聞いたところ、食品ロスの問題に関する意識が高いことが分かり、2019年度の活動テーマを「食品ロスの削減」に決定。どのような啓発活動を行えばよいか、幹事会で議論を重ねました。

そこで出された案が、食品ロスを減らすために一人ひとりにできることを簡潔にまとめた冊子を作り、食品ロスの現状を多くの人に伝えようというものでした。めぐるくん推進友の会では、年間約15回、各区のふれあいまつりや環境イベントに出展しており、そこで出会う人たちに食品ロスについて知ってもらいたいと考えたのです。

暮らしに役立つ一冊に

冊子作りの第一歩として、2019年２月から８月にかけて、環境イベント出展時に食品ロスに関するアンケート調査を行いました（10代～70代の男女536人が協力）。食品ロスを出さないように心がけていますか？の問いに、94%の方から「はい」の回答が寄せられました。「はい」と答えた方が具体的にどんなことに気を付けているかについても紹介することにより、生活者の興味をひく内容が「非常に分かりやすい」と好評です。

更に、昔ながらの暮らしの知恵を紹介した「おばあちゃんの知恵袋」には、ジャガイモの皮が掃除に役立つことや、リンゴの皮で鍋の黒ずみを綺麗にする方法など、23の暮らしの豆知識を紹介しています。野菜や果物を皮ごと美味しく食べたり、生ごみをたい肥化するなどの方法と組み合わせ、一人ひとりの暮らしに寄り添った食品ロスの削減・ごみ減量の実践につながる目から鱗の情報が満載。

A5判で手にとりやすい冊子「食品ロスを減らそう！！」

※正式名称は、食品ロスの削減の推進に関する法律。2019年5月31日に公布。

手作りワークショップが大人気！

めぐるくん推進友の会では、小学校や児童館などでの「出前講座」やイベントでの「エコ工作」にも力を入れています。これらの準備も、幹事の皆さんの大切な活動。取材時には、におい袋の作製の打合せをしながら、布地を提供する人、裁断や縫いものを担当する人など、それぞれの得意なことを活かしてイベント準備を進めていました。

今年度リニューアルした「こども向けごみ分別ゲーム」も小学生を中心に大人気。小道具などは手軽に持ち運びやすい小さなサイズに工夫しました。内容も子どもたちが楽しみながら身近なごみについて考えてもらえるよう幹事の皆さんのアイディアがたくさん詰まっています。

手作りのにおい袋

設立 25 周年に向けて

ごみ分別ゲームに挑戦

現在、めぐるくん推進友の会が抱える悩みは、活動拠点がないということです。また、会の備品などを髙橋会長の自宅で保管しているため、出前講座やイベント出展時にはどうしても備品の運搬が大変です。「せっけん教室や紙すき教室などのワークショップを定期的に開催できる、めぐるくんの拠点があるともっと活動しやすくなるなあ」と髙橋会長。「今後は、大学生とも一緒に活動をしてみたいし、中学生や高校生とも、『これからの社会』『どうしたらごみを減らせるか』について話をしてみたい。「ごみを出さない」「減らそう」だけじゃなく、めぐるくんの活動そのものを大きく転換させるような、新しいことにも挑戦してみたい」と力強く抱負を語ります。「活動を続ける会員の皆さんの体力的な負担を減らしながら、自分たちのメッセージを伝えていけたら」と笑顔で話します。

最後に、めぐるくん推進友の会の原動力は何ですか？と問いかけました。「20年以上に渡ってめぐるくんを盛り立ててくれた山内寛顧問のご苦労を改めて感じつつ、会員の皆さんからの声を基にみんなで一緒に活動することが、めぐるくん推進友の会のパワーになっています。皆さんからの熱意に、『もうちょっと頑張ってみようかな』と背中を押してもらっています」。

生活者の目線で、自分たちにできることから行動する。未来を担う若い世代への働きかけは、令和の時代、益々必要とされています。

こども環境フェスタにて

京都市ごみ減量 めぐるくん推進友の会

京都市は1994年にごみ減量のため「廃棄物減量等推進員制度」を開始。公募で集まった市民は10年間で約800人にものぼります。1996年には廃棄物減量等推進員の活動の受け皿となる「京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会」を設立、以後20年以上に渡りごみ減量啓発活動や出前講座を行っています。

めぐるくん推進友の会では、一緒に活動していただける方を募っています。興味をお持ちの方は、ぜひめぐるくん推進友の会事務局（髙橋）までお問合せください。TEL：090-5159-1313

松村香代子（2019年11月11日、20日取材）

Hand in Hand

ミッションは「カカオを通して世界を変える」
～ Dari K の挑戦は止まらない！～

持続可能な社会を実現するために、インドネシア産のカカオを通じたソーシャルビジネスに挑戦する企業がある。世界最大級のチョコレートの見本市、パリの「サロン・デュ・ショコラ」で４年連続ブロンズアワードを受賞したDari Kだ。

Dari Kという社名にかける思い

社長の吉野慶一さんは、慶応大学→京都大学大学院→オックスフォード大学大学院→モルガンスタンレー証券と、まさにエリート街道を歩んできた。この経歴を捨ててまで、会社設立に至ったきっかけは旅行中に見た世界のカカオ生産地が記された一枚の地図。そこでインドネシアがカカオの世界有数の生産国であることを知った。「カカオといえばガーナが有名なのに、なぜ？」どんなに調べても、この理由が分からなかった。そこで、吉野さんはインドネシアに渡り、１週間ほど現地農家に滞在することに。ここでの経験が後のDari K設立につながる。この社名の由来はインドネシアのスラウェシ島※の形がアルファベットの「K」に似ていることから、「スラウェシ島から」（Dariはインドネシア語で「～から」）という意味と、京都を英語表記にしたときの頭文字「K」を取って「京都から」という意味である。

一世一代の決断

滞在中、インドネシアのカカオが日本にほとんど輸入されない理由がはっきりした。カカオの「発酵」（チョコレートを美味しくする重要なプロセス）をしないまま、先物市場に基づく国際価格で売買されていたのである。発酵してもしなくても買い取り価格はほとんど同じなので、カカオ農家にしてみれば手間をかけたくないのは当然。現地農家は自分の作る作物に無関心でチョコレートになることすら知らない人もいる。自分たちの育てたカカオに関心が持てない農家の表情は皆、無気力だった。

お世話になったカカオ農家にお礼を告げて帰ろうとしたとき、農家が吉野さんをカカオのバイヤーと間違えたのか「買わないのか！？」と激しく言った。吉野さんは「買います！」と答えた。この時、彼はカカオ農家が直面する不条理な現状を何とかしたいと考えていた。

数えきれない苦労と工夫が夢を実現させた

家中が購入したカカオ豆で溢れる中、豆を買い取ってもらえないかとメーカーに相談しても相手にされなかった。自分でカカオ豆からチョコレートを作ろうとしても機械はウン億円…。それでも吉野さんは諦めなかった。独学でチョコレートの製造を学び、何とかコストを大幅に削減することができた。一緒に頑張ってくれるパティシエも見つかり、ついに京都市内にお店をオープンさせた。吉野さんのインドネシア訪問からわずか3か月後のことであった。

本当のフェアトレードとはこういうこと！

Dari Kのチョコレートは京都の有名ホテル等で広がる一方、現地のカカオ農家から発酵したカカオ豆を、設定した条件をクリアした分だけ高値で買い取ることにした。吉野さんは言う。「よくある“高値で買ってあげる”フェアトレードではなく、“頑張った分だけ報われる”システムを作ったんですよ」。現在、Dari Kと契約している農家は500件程だが、インドネシアには50万件のカカオ農家がある。そして、今、多くの農家がDari Kとの契約を望んでいる。挑戦し続けるDari Kに世界中の多くの人が熱い視線を注いでいる。

※インドネシア産カカオ全生産量の７割以上がスラウェシ島で生産されている。

Dari K株式会社
代表取締役　吉野 慶一
〒603-8205 京都府京都市北区紫竹西高縄町72-2
TEL：075-494-0525　FAX：075-320-1323

高野拓樹（2020年１月８日取材）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら）　和（なごみ）

第25回　「美山の暮らしから感じること」

まるで昔話のような景色に懐かしい気持ちになる日本の原風景『美山かやぶきの里』。1993年には国の「重要伝統的建造物群保存地区」に認定されました。

そんな美山の歴史や暮らしを伝える「美山民俗資料館」。こちらではかやぶき屋根の裏側を見ることができます。くぎなどは一切使わず、木、竹、縄、そして、すすきから成るかやぶき屋根の厚みはおよそ60㎝。長い年月と共に少しずつ圧縮され、また苔むしていきます。葺（ふ）き替えの目安は20年。そうやってこの美しい風景と暮らしが守られ、職人の技術も継承されていくのです。その他、囲炉裏があり家族団らんの様子が浮かんできたり、当時の暮らしを知る様々な道具が展示されています。

この美山民俗資料館は約200年前（江戸時代後期）に建築された農家住宅を譲り受けたもので1993年から資料館として活用されていましたが、2000年に母屋と納屋を焼失しました。詳細な記録が残されていたことで、2年後に復元し、倉で焼失を免れたものや近隣の家から寄贈されたものが並んでいます。

かつての暮らしは今よりも不便だったかもしれません。ですがその暮らしがあって今があること、またどんな文化が根付いていたのかを感じ、その知恵や工夫を学んでほしいと中野貞一館長は話します。

今も大切に守られているかやぶきの里の風景を眺めながら、今こそ当時の人々の心の豊かさ、人の結びつきの大切さを考えるべきなのかもしれません。

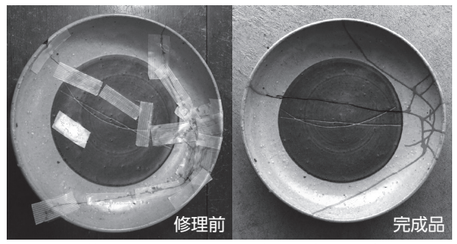
海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。織りなす「もっぺん」物語　第12回

STOCKROOM（ストックルーム）

修理といえば多くの場合、壊れたことがわからないよう元の姿に戻そうとする。しかし、日本には壊れた部分をあえて目立たせ、“景色”として新たな魅力を生み出す伝統的な修理法がある。それが「金継ぎ」。陶磁器の割れ、欠け、ひびなど破損した部分を漆で接着し、金や銀の粉で装飾して仕上げる修復技法である。

この技法で、傷んだ器に新しい命を吹き込むのが、アンティーク雑貨店「STOCKROOM」のオーナー國本みきさん。海外からコンテナで届く食器が無残に破損しているのを見て「せっかく海を渡ってきたのに可哀そう」と感じたことが金継ぎの技術を身につけるきっかけとなった。彼女のもとには数々の修理依頼が届く。茶道具や美術品が多いのかと思いきや、「日常使いの愛着のあるものや形見の品、大切な方からの頂きものなどがほとんどです。本当に気に入ったものを長く使い続けたいと考える方が増えてるんでしょうね」と國本さん。



器の持つ風合いを生かして黒とグレーの漆で仕上げている

器の修復作業をする國本さん

依頼は直接持ち込まれることが多く、どの依頼主も「直してでも使い続けたい」という熱い想いとともに大切な器を國本さんに託していく。工程ごとに漆を乾燥させたり、根気よく陶片を継ぎ合わせたり、時間と手間のかかる手仕事だ。「依頼主の想いの籠もった品だからこそ失敗はできない。一品一品が真剣勝負」という思いで作業をしている。完成した器を手にした依頼主から「あのキズがこんなにきれいに！」「割れる前より素敵になった！」と笑顔が引き出せたら、ホッとするという。一度壊れた器でも、それまで以上に愛着をもって使ってもらえることが、何よりの喜びだ。

破損状況や使用する材料によって料金は異なるが、「普段遣いのものだから」と高くても5000円は超えないようにしている。國本さんならではの値段設定も気軽に金継ぎを依頼できる理由の一つかもしれない。

▶アンティーク家具と雑貨のお店「STOCKROOM」
京都市上京区西三本木通荒神口下ル上生洲町229-1　かもがわカフェ１階奥　TEL：075-212-8295

藤原幸子（2019年11月18日取材）

地域のお祭りを通じたエコ活動の実践

～西院ふれあいまつりはエコでいっぱい～

「お祭りの秋」といってもいいぐらいに秋の京都市内では、自治会などが中心になってたくさんのお祭りが開催されている。その中で今回取材したのは「西院ふれあいまつり」。30年以上前から続くこのお祭りでは、独自のエコ活動が行われていた。

西院ふれあいまつり

取材に応じていただいたのは、右京区自治会連合会副会長で、西院第二自治連合会地域ごみ減量推進会議会長の鈴木義康さん。西院ふれあいまつりを運営する中心人物のひとり。

西院ふれあいまつりは今年で33回目。地域のスタッフ約200名が協力して運営し、毎年3000人を超える来場者が訪れる地域の一大イベントになっている。開催場所が京都市立西院中学校ということもあり、多くの中学生がボランティアとして参加している他、右京区内の大学からも学生がブース出展するなどお祭りを盛り上げていた。

エコなブースでいっぱい！

お祭りの出店ブースといえば、焼きそば、たこせん、フランクフルトなど食べ物系が思いつくが、「リユース子供服無料配布会」や「おうちの省エネ相談」など、エコなブースも盛りだくさん。「これらのブースは、右京エコまちステーションや京都市地球温暖化対策室の他、京都外国語大学や京都光華女子大学など、学生さんによる出店もしていただいています。」と鈴木会長。

こども服のフリーマーケット（並べられた子供服は小学校の参観日などを通じて集めている。）

エコスタッフの活動

お祭りでは飲食をするのでどうしてもたくさんのごみが出てしまう。しかし、そんなごみもきちんと分別すれば資源として再利用できる。「もちろんリユース食器は導入していますが、どうしてもでてしまうごみについては、分別活動を推進するエコスタッフが、ごみ分別回収ボックスの前に立ち、分別ルールを説明しています。集まったごみは拠点に集め、もう一度汚れ具合などを確認し『資源ごみ』、『燃やすごみ』に分けプラスチック容器や紙コップ等は重ねて体積を減らします。ごみ袋の節約をしながら改めて京都市指定のごみ袋にいれかえ、ごみの量を確認した上で回収してもらっているのです。その結果、来場者のごみ分別への意識が高まり、ポイ捨てが無く、お祭り会場にはごみがほとんど落ちていないんですよ。」と鈴木会長はごみ減量への地道な努力を語ってくれた。今年も地域ボランティア、中学生、大学生合わせて約30名のエコスタッフが分別の啓発を行っていた。

リサイクルボックスの前で分別を啓発するエコスタッフの皆さん（中央が鈴木会長）

お祭りも時代に合わせた進化が必要

「少し前まで、このふれあいまつりから出るごみも十分には分別できていなかったんです。でも、毎年募集するエコスタッフに地域の人が集まってくれて、そこに中学生も参加し大活躍してくれています。さらに近年は大学生も加わり異なる世代との交流が広がり、そのなかでごみの問題や地球環境のことを考える場になっていると思います。」西院ふれあい“エコ”まつりに改名しては？とたずねると、「そう言えるようにもっとエコ活動を推進したいですね」と鈴木会長は笑って答えてくれた。

高野拓樹（2019年11月10日取材）

ごみ日和 83 京都市ごみ減量推進会議・情報誌 2020. 春
編集・発行／京都市ごみ減量推進会議　普及啓発部会（事務局 公益財団法人 京都市環境保全活動推進協会 ごみ減量課）
〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内 TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971 E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp URL: http://kyoto-gomigen.jp/

ごみ減　検索 で検索できます
植物油インキで印刷しています。 VEGETABLE OIL INK
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！